



平成21年1月19日14時 資料配布

配布先
神戸海運記者クラブ 兵庫県政記者クラブ

この件に関するお問い合わせ先
神戸運輸監理部 総務企画部 企画課 (担当) 伊藤課長・塚本補佐・橋 (電話) 078-321-3144

1月29日「沼島モデル」シンポジウム開催

～観光による離島単独航路維持と地域再生・協働モデルの構築～

神戸運輸監理部では神戸大学と連携し、兵庫県南あわじ市沼島をモデル地域として、観光交流人口を増やし離島単独航路を支える、島民主体の持続可能な離島観光モデル(沼島モデル)を構築する調査を行ってまいりました。今般、事業の総括と、これからの地域観光が目指す姿を展望するシンポジウム(一日神戸大学)を、平成21年1月29日神戸市内にて開催します。

少子化と高齢化が進む沼島(人口約600名)では、唯一の生活航路を運営する沼島汽船の経営状況が厳しく、将来の航路維持に不安が生じています。観光による利用客を増やして航路を支え、島を活性化できないか。学官連携で島民有志をサポートする委員会及び地元部会を設置し、島民主体の観光による地域づくりに取り組みました。歴史、自然などの観光資源に加えて、島の主要産業である漁業を活かした取り組みや、島の玄関口である旅客船ターミナルを交流とおもてなしに活かせないかなど、たくさんのアイデアが出されました。

今まで観光と結びつけていなかった地域資源を観光の視点から発掘して磨き上げつつ、自然が荒らされたり人々の生活がおびやかされることの無いよう、観光による地域活性化と島民の生活との調和を目指した今回の取り組みは、離島のみならず全国の頑張る地域の参考になると考えています。

記

- 日時 : 1月29日(木) 13:30～16:30 (開場 13:00)
場所 : 神戸市勤労会館 3階 308号室
内容 : (1) 沼島モデル発表
(2) 基調講演
(3) パネルディスカッション
定員 : 70名(一般参加可・無料・先着70名・事前申込必要)
申込先 : 神戸大学支援合同会社(神戸大学連携創造本部内) (詳細は別紙参照)

当日の取材については、会場の都合もありますので1月28日(水)16:00までに企画課(電話078-321-3144)までご連絡いただくと助かります。

「沼島モデル」シンポジウム

日時 平成 21年1月29日(木) 13:30~16:30

会場 神戸市勤労会館 3階 308号室

(神戸市中央区雲井通5丁目1番2号)

主催 国土交通省神戸運輸監理部 神戸大学連携創造本部

参加無料

事前申込
先着70名

開催趣旨

淡路島の南およそ4.6kmに沼島はある。人口約600名の過疎と高齢化の進む島である。本土とを結ぶ唯一の交通機関である生活航路の維持と、島の活性化を目指し、有志が観光ボランティアを始めた。沼島モデルプロジェクトは、小さな島の航路の維持と地域づくりにかけるがんばりを産学官民がサポート、取り組みのエッセンスをモデル化し、全国に発信するプロジェクトである。観光資源の発掘、観光と生活の調和など「観光による地域づくり」をテーマにシンポジウムを開催する。

〈プログラム〉

13:30~13:40 沼島紹介ビデオ

13:40~13:50 開催の挨拶 田中 隆史(国土交通省 神戸運輸監理部長)
出来 成人(神戸大学 連携創造本部長)

13:50~14:10 沼島モデル発表 正司 健一 委員長(神戸大学大学院 経営学研究科教授)

14:10~14:50 基調講演「選ばれる観光地とは？」
“観光とは光を見せること、光を当てることだ！”
平田 進也氏(日本旅行西日本営業本部チーフ
マネージャー・ひょうごツーリズムビジョン委員)

14:50~15:00 休憩

15:00~16:25 パネルディスカッション
(パネリスト) 中川 宜昭氏(ぬぼこの会代表/神宮寺住職)
平田 進也氏(日本旅行 西日本営業本部チーフマネージャー)
正司 健一氏(神戸大学大学院 経営学研究科教授)
朝倉 康夫氏(神戸大学大学院 工学研究科教授)
伊藤 政美氏(神戸運輸監理部 総務企画部企画課長)
(コーディネーター) 富田 昌宏氏(神戸大学 経済経営研究所教授)

16:30~16:30 閉会の挨拶



平田 進也 氏
浪速のカリスマ添乗員
本音で語る



中川 宜昭 氏
沼島で観光ボランティア
ぬぼこの会を上げる



正司 健一 氏
交通政策・交通経営が専
門です。沼島を題材にし
て皆さんで考えましょう



朝倉 康夫 氏
観光行動を含むヒト
の交通行動の調査と
分析に関心がある



伊藤 政美 氏
プロジェクトの
発案者。観光立国
の実現に取り組む



富田 昌宏 氏
海・船・港を中心
に交通・観光を
研究しています

“ 沼島モデル ”

沼島の地域ぐるみで取組む観光・離島航路活性化への提言

地域と創る持続可能な離島観光モデルづくり・
離島単独航路の維持活性化調査研究委員会

委員長 正司 健一

1 はじめに

“ 沼 島 ”：兵庫県南あわじ市沼島

沼島の現状：人口

離島航路・沼島汽船の状況

産業

2 調査の目的

本調査は、離島航路の維持・活性化を目的とする交流人口増加のために、ニューツーリズムや「観光」を切口に、沼島に暮らす人たち自らが、島の魅力を再発見し、島民各自が内在的に持っていた誇りを顕在化させ、島内外の人たちと世代を超えて、共に地域づくりに取り組むことで、沼島の歴史、自然、味覚、おもてなしに心を惹かれる観光客を増やし、生活航路の維持と島の活性化を図り、島の生活、自然、地場産業と観光が調和した、持続可能で交流人口増大が図れる地域の創意工夫による離島観光モデル（沼島モデル）を作成すること、及び、実践するための課題を見出すことにある。

豊かな自然、地場産業、地域コミュニティの結びつきという島の長所を大切に、島民自らが主体となり、島内外の関係者の協力を組織的に得ながら、どのような「観光」を梃子にした地域活性化を目指すのか戦略の方向性を定め、実践することにより、一つの全国の離島・過疎地域の参考になる「離島の観光地域づくりモデル（沼島モデル）」を発信する、以上が本調査の目的である。

3 沼島の観光についての現状と取り組み

観光ボランティア「ぬぼこの会」の活動。

同会が案内した島外からの来訪者は、設立初年度である平成19年度800人を越え、20年度では2200人強になっている。

4 沼島モデルのポイント

沼島モデルでは、地域のオーナーシップを重視し、島に暮らす老若男女が主体となり、これを行政機関、大学がサポートする体制を組み、以下のポイントで取組んだ。

（1）島民主体の観光地域づくりを実現する

離島の観光地域づくりの主役は他ならぬ島民自身であり、離島観光(他地域の観光でも同

種の議論が重要となると考えられるが)では、島の暮らしと観光の調和が特に重要である。よって学識経験者、行政機関等も委員とする委員会のいわば実働部隊として、「ぬぼこの会」ならびに沼島の各種団体を構成員とする「沼島総合開発会」からなる「地元部会」を設置し、誰に来てもらい、何を観て(体験して)・感じてもらい、島民は、何を守り伝えたいのか、島民主体で考えてもらう体制を整え、島全体で観光に取り組む気運を醸成する。

(2) 島の観光資源を把握する、資源を商品に磨き上げる

他の離島観光と差別化を図り、リピーターを獲得するためには、もてなす側は、素朴さの中にもプロのおもてなしをしなければならず、島内のヒト、モノ、自然とあらゆる観光資源を把握(ないものねだりではなく、あるもの探し)し、資源を商品に磨き上げることが重要。

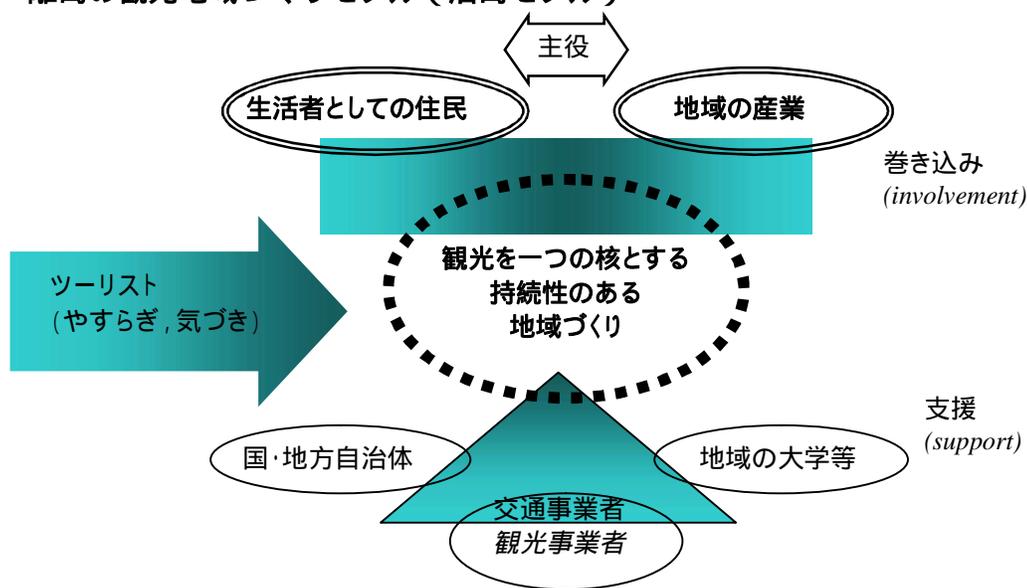
ここで注意が必要なのは、歴史(的场所)、歴史的建造物、街並み、自然、来訪者の存在をも意識した各種アトラクションといった、通常、思い浮かぶものだけが、観光の中核的商品ではないという点である。とくに沼島の場合、島の何気ない自然・空間そのものが、人々に自らの内面を見つめ直すといった貴重な雰囲気醸し出す側面を持っているだけに、可視化し難い、しかし商品として磨く価値のある体験についても検討する。

(3) 持続可能な観光を実現する

1回限りのイベント、一過性のブームではない持続可能な観光を実現することに留意する。そのためには、下記の6点が重要であると考えられる。無理せず、島民自身ができることを、自らも楽しみ行う。特定の人物、事業者だけが利益を得る又は貢献するのではなく、島全体で利益を享受し貢献もする。担い手・協力者を確保し、役割分担する。

無償奉仕のみに頼る観光は継続しづらい、継続と素朴さの中にもプロのおもてなしをする心構えを持つためにも、島のため汗を流す者へは感謝と薄謝があって良い。観光のマイナス面(住環境、自然環境等への影響)も理解し、マイナス面を克服するための方策を同時に考えておく。島全体に無理がかからない範囲を考える議論と、現状を何も変えようとしない消極的議論を峻別する。

5 “離島の観光地域づくりモデル(沼島モデル)”



6 具体的な取組み

「委員会・地元部会の意見等まとめ」(別表参照)

島来訪者のグループ別に具体的な取組みの方向性の紹介。

7 中長期的課題

増加した来訪者が、乗船料以外に、島でお金を気持ちよく使える施設・しかけ・商品を考えること。

沼島への交通アクセス整備の充実。

情報を共有する体制を確立すること。

事業者および利用者の努力を誘導するような離島航路補助制度

以上

パネルディスカッション資料

観光による地域再生・協働モデルの 構築「沼島モデル」のコンセプト

国土交通省 神戸運輸監理部
総務企画部 企画課長
伊藤 政美



平成21年1月29日



1. きっかけ

H19.11 神戸運輸監理部と自治体との連絡会議で沼島の観光ボランティアによる活動を知る。

H19.12 沼島を視察。観光ボランティア関係者の話を聞く。

- ・島の将来を担う子どもたちに、島の歴史、文化等を伝えたい。
島民の生活航路を守りたい。
→感動！
- ・地域づくり活動を島全体の取り組みにしたい。
→共感！
(感じたこと)
- ・観光への不安（観光は島のためになるのか、暮らし・自然が荒れないか）
- ・ぬぼこの会の負担（新たな仲間・拡がりの必要性）



応援してあげたい！

H20. 5 関係者との打合せ（下調査）

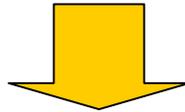
H20. 9 調査委員会スタート



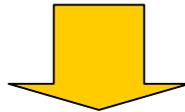
2. これまでの地域交通活性化方策と新たな視点

従前

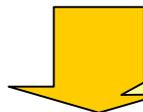
- ・ 便数、ダイヤの見直し
- ・ PR活動（パンフなど）
etc



通勤できない、買い物行けないような便数、ダイヤでは島の暮らしが成り立たない

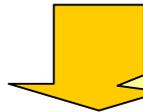


少なくとも現状は維持したい



しかし

島民の利用だけで将来も航路を支えられるか不安



注目

視点

観光交流人口を増やして、生活航路の下支えができないか！



3.観光を活用して地域が抱える課題に取り組む

- ① 観光交流人口を増やして、地域の潜在成長率を高める。
 - ・雇用の創出、経済刺激
 - ・地域公共交通の維持

- ② 地域コミュニティの活性化
 - ・地域協働
 - ・外部人材(産学官民)との連携
 - ・ふるさとの歴史、文化等の伝承、共有

人口減少・高齢化が進み、唯一の公共交通である離島単独航路の維持が危ぶまれる兵庫県南あわじ市沼島をモデル地域に、観光を活用した、生活航路維持と地域コミュニティ活性化を図るパイロット事業を、国土交通省神戸運輸監理部と神戸大学の連携にて実施。



4. 調査コンセプト

地域づくり

沼島モデル（観光を活用した地域再生・協働モデル）

①島民主役・拡がり

- ・島の老若男女が役割分担、自ら汗をかく、但し無理はしない
- ・合意形成：島民有志で意見を出し合いマスタープランを作成
- ・外部人材活用（大学など）

②ヒト、モノ、自然、文化など地域の資源を発掘して観光資源に磨き上げる

- ・ないものねだらず、あるもの探し、できることから始めよう
- ※沼島に「ない」と落胆せず、神戸、大阪に「ない」、沼島に「ある」ものを発掘して磨こう 都市にないコミュニティ・交流→心通う沼島ならではの観光
- ・島の歴史、文化等の伝承、共有

③観光と自然・生活の調和

- ・島の自然と暮らしを荒らさない
- ※観光空間が生活空間でもある離島は特に配慮が必要

④経済循環

- ・お金落ちずにゴミだけ落ちたでは持続しない
- ・持続可能な観光には地元の潤いも必要
- ※現金は人を現金にする。→悪いことではない。「また来るよ」と言ってもらえる「おもてなし」ができれば良い

沼島観光のアイデア (たたき台)



パネルディスカッション反映版

平成21年1月29日

国土交通省神戸運輸監理部

(伊藤政美・塚本量敏・橘由以子)

現在の沼島観光

- 沼島の自然・歴史巡り（ぬぼこの会）
- ハモを食べに来る
- 島の周遊観光



島巡りツアー



はも料理（木村屋HP）



周遊

【課題1】 沼島の自然・歴史巡り(ぬぼこの会)

○ ぬぼこの会の負担軽減

(現在) ぬぼこの会の中心メンバー
(5名ほど) がフル回転している。



ガイドの仲間を増やせないか？

- ・ 忙しそう、家事もある、土日は家族と出かけたたい・・・
- ・ 歴史を覚えるのはしんどい・・・



- ・ 毎日でなくとも良い
- ・ 歴史に詳しくなくても良い



現在の島巡りツアーに一工夫！

【課題2】 はもブランドから地域ブランドへ

○ 沼島と言えば「はも」その他は？

(現在) はもの季節に来訪者がとくに集中。



1年を通して旅行者を呼び込めないか？
アジの干物、ワタリガニ、フグだってあるのに・・・



知られていない 優良な素材でも情報として消費者と
旅行社に届いていないと意味がない

「沼島の名前」「はも」は知られている←他地域より断然優位



地域ブランド化で、そこで採れるもの、作ったものすべてが
ブランドとなる(富良野のじゃがいも、たまねぎ、ワイン)
沼島の島ぐるみの**出会い・味わい**を地域ブランドにしよう!

【課題3】 アクセス

○ 沼島への行きやすさ



距離の負担を感じさせない工夫

Key
淡路島の
広域観光圏

【課題4】 沼島の経済的潤い

○ ごみだけ落ちる観光は持続しない。



旅行者は「理由をつけて」財布のひもを緩めたいのだ



旅行者が財布を開く理由（地域の資源を商品へ）
をつくろう！

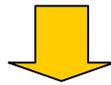
「淡路島観光圏」を活用する

【観光圏】 2泊3日以上滞在型観光を促進する
ための広域観光施策

→平成20年10月 淡路島を認定

【支援メニュー】 旅行業法の特例

ホテル・旅館が観光圏内の地域密着型ツアー
を販売できる



沼島を淡路島2泊3日コースの目玉観光
スポットにしよう！

初日 [金曜17:40三ノ宮発-19:14福良着]

三ノ宮から高速バス路線のある福良、洲本へ
淡路島本島のホテル・旅館で1泊

翌朝 [土曜]

福良、洲本のホテル・旅館が販売する沼島ツアー
→淡路島本島のホテル・旅館から小型バスで沼島に行けば、
三ノ宮から直接、沼島を目指すより距離の負担は軽減する)



[課題3] アクセス面の心理負担軽減

翌朝、沼島を目指すかはコンテンツしだい

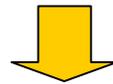
○ 観光コンテンツのキーワード

ハートにドキュン、胃にドキュン!

[課題2] 地域ブランド

心と胃が満足する観光は持続する

※地域資源を磨いて活用
[課題4] 沼島の経済的潤い



朝とれたての沼島の魚のどんぶり飯を食べに行く

- ・朝とれたて、大盛り（若者）、彩り・種類（熟年）
- ・食べながら、どんぶり魚の漁法・特徴の話聞く

※あらかじめ、どんぶりツアーの実施日を決め、前日予約・前金

（ホテル取りまとめ）とすれば、売れ残りの心配がない

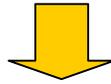


※沼島の漁業、飲食業に拡がり
[課題1] ぬぼこの会の負担軽減

食後の運動がてら、島を散策

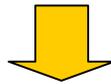
- ・どんぶりがメイン、食べれば満足。島を軽く散策しながら島の暮らしや出来ごとを話すだけでもおもてなしの気持ちは伝わる

※沼島の歴史、自然の植生に詳しくなくても良い
[課題1] ぬぼこの会の負担軽減



2日目[土曜夕方まで]

沼島から淡路島本島の別の観光地、そして、
2泊目のホテル・旅館へ



3日目[日曜朝]

淡路島本島のホテル・旅館発

沼島での満喫含め淡路島全体で
2泊3日以上での満喫

～次のステップ～

○他の地域観光との差別化

※地域の素材をそのまま見せるだけではリピーターは来ない

○はじめての訪問者とリピーター

※また来てしまう仕掛けが必要